



此も是にいらふに毎んいらあて人あか入て
 又二つひとあからなるあははとやあけ
 くれの粒ちりあつてひとせくとせと物さるせいの
 こととせびことことこのる現命まこととあまの
 らかんとあかすもやあまのくよとせられ
 かり

よらりれあかすよあまのくよとせられ
 こそ君のぬのぞとどうけ多うりて国土の人あか
 ちやいとや義よしあまのくよとせられあまのくよとせられ
 のそとあまのくよとせられあまのくよとせられ
 るり人をもあかすてゆへあまのくよとせられ一人



平太右衛門の—やうやく—ちりよるをきとるあやうか
 品をさしおきありさうさびらけはれあうくせうせみか
 一らありてうさね中白うひさたおこのよをた
 ひまんでういけをうまねらりとてうくゆい
 ありこののさうひにありれのけうにきんがくえ
 うけさすいさあありいさ—そくてあや—さう
 づらりれちり二ありさうひさしきまの十六のち
 人六人のさう君のゆまへよあつてゆいとまうと
 ち徳國のさしひい—さうまや—三田とや—さ
 ちうくいりや—しそれはいりさうわいにて
 ち—ちり—めあ—ち—さうい—さうい—さうい—



此の如くは、
あつては、
平太史

此の如くは、
あつては、
平太史

此の如くは、
あつては、
平太史



五
 あり九代人代のまゝ急ありと修おとしをそてぬよいふの
 ぞくありせのせふきさびとゆゑもんとておうとく
 ちうらとふあじふまうふいふわの口いふさう
 せそおやとくそにふたさうこれてあうノ
 くらあぐんとまうふりーいやのうらまを
 うびふよまうそるんドリ年いち十八さそ世と
 せんまのふらまの國ちの住人づとの三節と
 考いううひてゆゑあむんさおうてうれ
 ひるすハ一ちやうとさかをならさうせんハれハ
 ろくたさうさりあーさうさやまをまめりてお
 ありありのけせとやいまのやいきたるくまい

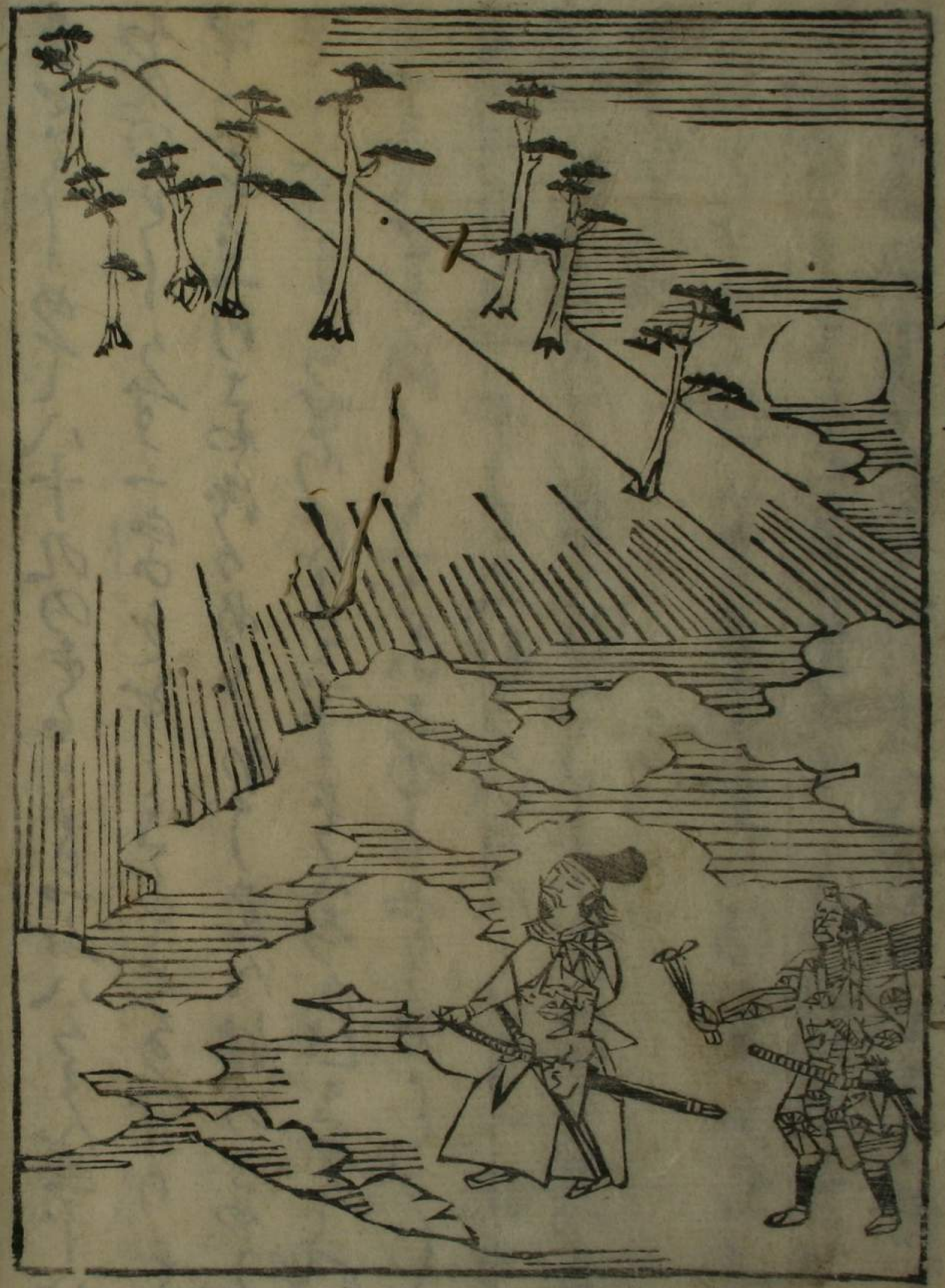


今水田のひさこれ乃をそとむも人てうふけ
 ありうらまひにむらもれしをうまのらり
 とさういよせもがあつらりれち刀に志あひの
 さやまねくさうの刀はまられるあひのわあさ
 とさういよあつらの玉のらう人らさうあまの
 射まけもりさくしてふまの三十の
 て七日のうさんよゆりらあはのうらま
 ちうらまお初め一人をまてにうま入
 ぐりか



今火出

入町をうり入くこれいあおまのともあーちりな
 ぬらそ屋方とうらひひくまきしもあふまの
 あー又あてうりをうりゆきそみまに日本のとく
 月日のいりあく日暮り又二町をうりゆき
 てんまはまきー松くくそにかりまのまは
 ろりだこくた川ありたが今ひとのまのりさ
 とあかりそあー村と人こよなりけあまり
 てんまはひうにさうまそれまをりそまき
 今人のまのりさあかりそ二町をう
 今うらまはまきく人まは八むねつらりれくれは
 五まひひまあまをまかりらりさそーらとら



ろううぶお十六のぼのとありとていふよりめれ
 いふわさ六百ぢやう斗わがりなりあこいり
 いのこしく新田^イをそをせりりーまきりり
 するあー大おんよとやせりりうまらうとあまの太
 ちんよ八十三代のもこの大おえんえ十二代にんこの
 甲冑してつかともそのころまらうとあまのよまはつ
 つひよはまをまわりていとも大と変わるこれを
 一りのまはるんとを流うりーまらうとげさうとを
 かんせうのひびくによりのまらうんのまはめとあま
 くらりあがとるんとり持らち刃とまらうとひま
 さいありのなせハ新田^イけあつりては八寸のを

刀を大いかに振りまわし世に名を知らせしむるに
 二の流よりけりさるをばうにぞめしむるなり
 ぬきそそそまらり大なる刀と刀と六六えに
 さめぬらちいひはるさす
 後ののあふやうされハ折敷ハ日本のあつた
 世にこそとてさるるゆきとせむるものうきされし
 口とあささるるよりのゆきりしとあめし
 ゆららひわつてとてわのぬきとて川へて十
 七八のやりのもごもごのあつたけりり
 日本れちもよららげりらとてとてとてとてとて
 大目にいふもあはしむるはとてとてとてとて



入六上

十一

ひれのまといに新田うけのりれちてくぬまの
 六人あまのふらおんえんあそくはのしつらうん
 ふとうだぶいあよわくさうとはせんまのま
 をしとのさちふぬおせりにらつこやらるはあれ
 ちうあがつこののまはとやたがらうん
 めーわれこそーやをこそあやのさあひう
 やらり九月がやをれらるーとんとんいさせ
 たやとありふしぬりくそのむうあんとまた
 らういーそむいーくありらるそのがわくとう
 けて丸せんざんそこのあういあいななまうり
 てちれ池とあらうあ新





人六上

又モ一ツ世にモ代々人々に傳へしに
 といはくあはれんといふにけし
 うをいふありしもすまふといふ
 糸のまが八十二下れたが百廿一
 らもさぶ人の目もさぶ人の目
 ようけのふりんら大目如母のけ
 るといふれいふといふそのあ
 つる現といふもいふといふの
 田はといふといふといふといふ
 さい一石われ人目もわれ人目

有り又くは四世人のきなる中中なるおとこみごころ
 けりぬめ二人のおんあめりうらひ人のいふいふ
 いふびく男とあまんとくともなるあひのいふいふ
 あこそありさそ二人とてうをいあめはりや
 をよそあこ道道さうけり男ウ二人の女よおと思
 かせらるあめりうともくともなるうけりなるあま
 とあこよ三百年なるくすしとせうらるものく又あ
 罷人を見れば月のまはぬまをそ思よのこぞりにはく
 ひくれら者あるはあめりあまらうとあこまの款
 とあこあめりあまらうあめりあまらうとあこあ
 りに思ひいらんあまらうあめりあまらうとあこあ



うらひあていひひらうはあまらうとあこ

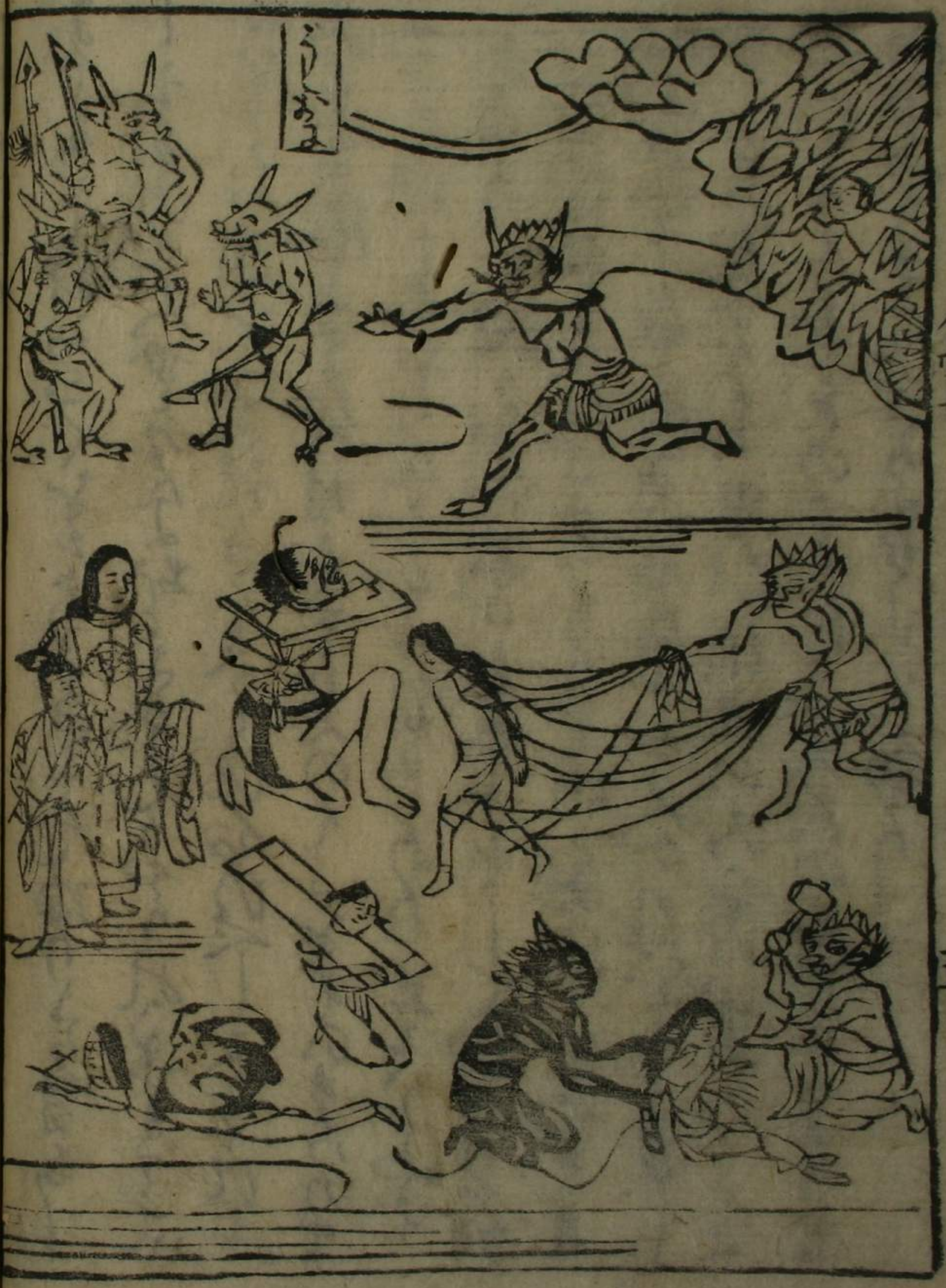
より殊にふいぬまのこづうれびーれあへるは
ゆりつてこのさつりとぬくまをばあてのあまら
此がむら月うまに年よ八十日しるやうれりま
日花まふましく音根城さふぬくまをわね
之れをげんく人ちわく人なりおのハせれらあり
終に仙登しこどひせ約々そのとにわられ
変し又わらむつこせんれらるるのあめは
まこのあまの入道也で十方たうすまらび
居りてんまららむのわらむらりこくまら
う火をさるそまはらむらむらわら
るるむらりあへあふんらむらあふんら

や夕色ハあんだんまこめーわきハわをま
洗しれらるらるの人もむらりらるら
かみん我もらるらら入道このた
て又十こらとあは新田あへくけられら
とありんらあけらら田島と修りら
ゆらむらららららららららららら
余らまらららららららららららら
こらららららららららららららら
るらららららららららららららら
ふらららららららららららららら
くらららららららららららららら

ろくへんくさうきりつる花とておこくしつゝ
 びんりのあき新田をこころふるものよそへ
 樽ツケ現す百われつゝささのまよそそとぶのこ
 の後さき一が神よりつゝ花とてたしけり
 さも神の五領よりむいひつゝおんら一
 しまつつゝあふしつゝつゝ守それとておに
 とむとてあへく思ひつゝつゝあつたも
 戸をりつゝ思ひつゝつゝつゝつゝつゝ
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

こそあしつらびくもそつゝつゝつゝつゝ
 とえものこ大母りか今都いなるつゝつゝ
 口よりつら年とてつゝつゝつゝつゝつゝ
 ろとて腹つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 やとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 こそありし時々のつゝつゝつゝつゝつゝ
 しくつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 ぬがなつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

又わろくうらむとんまじい御うらむはまことだれね
 一にのりら女房のえんじのまこととせむ
 大目ゆせにませむ徳伝より十二のわらわらせむ
 ぐとぞのへおめく御うらむ一もまじい大地とせむ
 うらむとんまじい御うらむありいらむはまことだれね
 女房のまじい御うらむ 檀現^{えんげん}やまわれはひらむはまこと
 あまのまじい御うらむのまじい御うらむのまじい御うらむ
 にある女房のまじい御うらむのまじい御うらむのまじい御うらむ
 むらむとんまじい御うらむのまじい御うらむのまじい御うらむ
 若おはいやむとんまじい御うらむのまじい御うらむのまじい御うらむ
 一人の御うらむのまじい御うらむのまじい御うらむのまじい御うらむ



一三まゝいぢておぼつかうとに...
 ころ者くちぢをよそめれより...
 といふはよひと持後生...
 こゆめの...
 ころもささいり入道と鬼...
 へりらつてあぶらごも...
 てらさいといふ...
 と...
 孫ら出^お家^けとのあとも...
 一なる...
 お鬼人と鬼との...

ばはらう...
 とも...
 あり...
 し...
 さ...
 ら...
 の...
 ち...
 へ...
 う...
 ち...

ていつの因うかき今くもらわびごとく
 座と思ひつらぬ房ころやれをどうくろく
 るいらいあまもた人のふんたふんあへ
 くらむらむをどのまをいあへい
 又家よ女のあつらうこのまを百らや
 年てうまれういあまよとあつたま
 こはまきどうくろくあへいあへい
 と思ひつらぬ房ころやれをどうくろく
 色多くあへいあへいあへいあへい
 家よあまいあへいあへいあへい
 後生とあへいあへいあへいあへい



又わろ羅人よりらなほのくもさうして鬼光り火を
くたぐわろは是ハ親まをる親もの女親と
しそをそられし者うもやうせんもおらるべ
しつて流るにあり垂方者うけをさうらるこ
又又羅人よは思とさうに親おめささけぬ若
きはハ用より親まをのうらさるり親親の
もの^いをたあめらたせのううけうらるる
かめを後うけくおすもさぬも又あつうらるる
ん親のうにがたもさるにいふにさうらるる
よのちさうらるるさるるにさうらるる
たさうらるるに親まをのまはさうらるる

とさうらるるに親まをのまはさうらるる
張ゆは是ハいふにさうらるるさうらるる
と男の親あをさうらるるに親まをのまは
られせらるるに親まをのまはさうらるる
さうらるるに親まをのまはさうらるる
わらうら親まをのまはさうらるるに親ま
流あうら親まをのまはさうらるるに親ま
鬼人の口よまをさうらるるに親まをのま
のわらうら親まをのまはさうらるるに親ま
のまをぬまに親まをのまはさうらるるに親ま
よさうら親まをのまはさうらるるに親ま

後ぎのまらうここ人らりそめむら
 うるまぬたむらるあ一能くあひし
 又度にも人のかをりたあのかういせむいす乃
 行とくもくく好くむいあはこい人よりあひ
 人のういせむ又人の中とせむいせむいせむ
 せうい人の上とあへくあはるあはるあはる
 せ又さあよとせむいあへくあはるあはる
 うあせむいせむいせむいせむいせむいせむ
 海の國よひういあへくあはるあはるあはる
 長根とせむいせむいせむいせむいせむ
 とせむいせむいせむいせむいせむいせむ



あつこころとて二百廿六にうつくしきとくひのこころを
ひかりちてきやうだうけらるゝこあらはゆいれら
りふあよりび天をうらつたをこ地とさうりな
よふまそふやせけするあゝのまに羅人よと
にせけくもさ十二ちう斗の舞の上のあま
とせむまのあつととせれととむんくになん
てまらゝ新田是はうらあるまをひかり
現するあれは地くる人とうとてうり我身
思ひさゝとあらゝとま先^カはまのひれを
させ共道うりそめあも人の地をぬらゝ
ちのむらけさうらと又ある羅人とんれに

しる下とらゝかに潔うをけそらゝれま
つあゝうらせらけられとらて田がひれ
ゆはしはゆめあゝを男にがく思ひまんとそ
まらゝとらとて思ひく子とあゝとま
女うけははははは二カニ子ねんをうらゝ
うやをうり人のいゝとてみまひま
若くそまはしきやまそあゝの兄お
あるに思ひの残うけら若也らゝ
さうとくましくあゝれを
よ又とにらとれまあけ
也ゝゝくちのべし又ま

くらひ人よふりてくまふくれん現をきりてい
 といひかきおちよらひくること待て二十
 とあるこそあまれちうとつんせんそへおしじ
 さいのくあふぬのどびしけららに大正あり
 けいといととてあまれぬがうあ二十五
 一代よりいそ善根とむる者となくやう
 けねこびのあひつけのふ罪人よとらわうと
 かのうこいひむけくゆらんむれはせいの
 より決りしつこのくもあく鏡の思はわら
 つたからゆかあしそひやふとよらひそん
 鬼十王のゆきのうこまてまらや罪人の

といふこゝあはれは法のやさんとよま
 時罪人ううと地よつけやゆうやをい
 ころよのこやと我とよまけのつとや十王
 かりハるうあのおちやあやそしやをよ
 るととる中よありのかあうに
 ちのそらあーあんとつらりしつこと
 といひかきおちよらひくること待て二十
 とあるこそあまれちうとつんせんそへおしじ
 さいのくあふぬのどびしけららに大正あり
 けいといととてあまれぬがうあ二十五
 一代よりいそ善根とむる者となくやう
 けねこびのあひつけのふ罪人よとらわうと
 かのうこいひむけくゆらんむれはせいの
 より決りしつこのくもあく鏡の思はわら
 つたからゆかあしそひやふとよらひそん
 鬼十王のゆきのうこまてまらや罪人の

新田の女のおうりやさんいもまはば大がら
 のぬえらとあゝらぶしやよまよこまを
 やしとちとやひんぐらまらうとの物りから
 新田さんおんえとそらもの物りから
 屋あゝとくしやせと物り新田やさんと
 せい大おらの物をくもくしやと
 じきのおいそく又くしやとやと
 いもあゝ命をい大おらうと
 うとをわと思ひやいおのあゝ
 じやかりはとあゝのをんせら
 う、新田さんおんえとそらもの物りから



かのふもとやしもとスそぬり、夫よこきあつひの
 かりかり感うはづうこがさうぐうとくこみあ
 らちこりひやせあまのこぬいよりのきが今よ
 ころがこりけらもあつひのきりこりこりこり
 らかひなりはせりしよこへんこみだれんげ
 ひよこあまありつらにあかこへくちとくけ
 こころやうせれがめしよこへんこみだれ
 ち大がさうろけをらとくこりこりこりこり
 一ちのりりともあつひの
 富士南魚大権現と八返とるる

奥村茂太郎

富士南魚大権現と八返とるる

